



進士 五十八氏

東京農業大学学長 / 同大地域環境科学部造園科学科教授 (農学博士 / 造園学・環境計画学・景観政策学) 1944年京都市生まれ。1969年東京農業大学農学部造園学科卒業。1987年東京農業大学農学部教授 1988年より地域環境科学部教授、現在に至る。1995年農学部部長 1998年地域環境科学部長 1999年東京農業大学学長、現在に至る。日本造園学会会長、日本都市計画学会理事、国土審特別委員、都市計画中央審専門委員など。主な著書に『アメニティ・デザイン ほんとうの環境づくり』1992、『風景デザイン 感性とボランティアのまちづくり』1999、(共に学芸出版社)ほか多数



子どもたちが公園で水と親しんでいる。(ドイツ)
(写真提供:『水の造園デザイン』誠文堂 新光社)

interview

水景と水系、そして水辺の体験

造園と環境教育の目的は同じだ!

水に関する遊びが実に多様化しています。それと共に、「水」を題材に環境教育を充実させていこうという動きも盛んです。「遊び」と「教育」というキーワードの裏に共通する「人と水とのつきあい方」 - 造園家として、以前から「環境学習」の重要さを指摘されてきた、東京農業大学の進士五十八学長にお話をうかがいました。

水はトータルにとらえるべき

以前から進士学長は、水の空間をスペースではなくプレイスとしてとらえておいでです(注1)。特に、より本来的なアメニティ環境を実現のためのチェックポイントとして、P (Physical: 実用性)、V (Visual: 視覚性と美観)、E (Ecological: 生態的バランス)、S (Social: 社会性・地域性)、M (Mental: 精神性)を八十年代から主張されています。こうした視点から見た水の機能を踏まえて、水の体験・水の学習の意義があると思います。造園学が、水の文化や環境教育にどのようにアプローチしてこられたか、おつかがいしたいと思います。

進士 昭和五十四年に『水の造園デザイン』(誠文堂新光社)という本を書きましたね。それがきっかけでいろいろな、おもしろいまちづくりの仕事に出会いました。その中で、今盛んになっている三島グランドワーク・トラストとのスタートにつきあい、地

域や風土との関係でデザインを考えるきっかけになりました。世田谷区の都市美委員もおもしろかったです。世田谷区民は約八十万人。ほとんどが新住民で、地元のことを知らない。「知るが愛する始めなり」という基本的な考えでしたので、世田谷区内をずいぶんと歩いたんです。その時、等々力溪谷(注2)で、子どもが遊んでいるのを見ました。溪谷の水に下水が入ってきているから、トイレトペーパーの成分が段差土の部分に絡みついてヌルヌルになっている。そんな所で子どもが滑って遊んでいたんです。それを見て私は、何だか哀れになってね。私が小学校の頃は、すごくきれいな川で遊んだ記憶があるもんだから、余計にね。でも、そんな汚い水でも、子どもたちは水に入って喜々としているわけです。ともすると我々大人はすぐに「○○(注3)が…」と言います。日本で水に親しむためには、まず第一に水質改善が不可欠というわけですね。でも、タイのバンコクの水upperマーケットに行ってみて、思いましたよ。あんな水でも、食べ物を洗ったり、沐浴したりしている。そう考えると、我々日本人はあまりにも水には贅沢で、水質に対して絶対納得できない、という気質があるようですね。それも大事だが、水質だけでなく、水辺の環境を全体として位置づけ、都市砂漠の中に少しでも水景と水系、水との体験を回復することを考えるべきでしょう。

造園学が目標としているアメニティの豊かな街づくりと、環境教育が目指すところは同じと言われていますが、水を媒介と

した、人と人との関わり方をわかりやすく伝えていくためには、どっしらいいのかがかええますか。

進士 環境教育は、人々に環境の大切さ、本当の環境とは何かを学ばせようということとです。ですから、本当の環境づくりを指す造園学と、同じ目標を掲げているといえるわけです。造園学は、主に視覚的環境をつくっているわけです。しかし風景というのは、実は全体環境なんです。ところが、昨今の環境論は水質だけを問題にしたり、大気中のCO₂だけを問題にしたりして、部分しか押さえていない。公害というマイナスの部分的環境を、何とかしようという発想でやってきたためでしょう。地球規模でもまったく同様で、相変わらず問題のある部分だけを考え直すという発想です。私は、対症療法で患部だけを直すという発想よりは、「本物の環境とは何か」という目標を掲げて、それに向かうべきだと思っています。問題部分は当然直さなければならぬが、総合性を見据えた上で根本を直さねばならない。トータルなものを目指すために問題を解決するというのと、細かく問題を分けて対策を打つのでは、全然違つんです。なぜかといえは、個別問題に対して対策を打つのでは、結果的にまた次のマイナスイヤスを生む可能性があるからです。たとえば、農薬を使いすぎて良くないというので、今度は遺伝子組み替え作物を造り出す。すると遺伝子組み替え食品というのが出てきて、それがまた別の問題となって叫ばれるようになる。

その原因は、狭い分化したものの見方をすることからでしょう。学問を細かく分けて考えることの弊害です。だから私は、緑も水も歴史も文化も、というベクトルで環境全体を捉えていこうとアピールしているんです。典型例として、「炎」の魅力があげられます。東京農業大学の収穫祭には、約十万人が訪れます。その収穫祭の最後に、ファイヤーストームがある。直径十メートル近い大きなファイヤープレイスを組んで燃やすすんですが、これが一生の思い出になるんですよ。それは実に感動的な風景です。炎というものが、感動を与えるんです。近代文明は炎を、熱と光に分けてしまった。コンロと蛍光灯に分けて操作しやすくなったけれど、炎の持つ感動は失われてしまった。水も同じです。デパートやホテルに行くとき水風景要素として見せている。視覚的にだけ水をとらえるため、プールや池の底を水色に塗る。動きだけを捉えて噴水を上げる。しかし、水が我々に与えてくれる本当の感動というのは、こんな方法では十分伝わりません。

子供たちは 水の魅力を素直に感じる

トータルな環境づくりとしての水辺環境の原点は、どこにあるのでしょうか。どうすれば水を生かしていくことができますか。

進士 水からの感動とはどんなものか、もう一度振り返りましょう。人間にとって本当にきれいな水は、すくって飲みたいくなる

ほどのものです。次に、裸足で入っていきたくなるようなものです。体ごと浸かって、沐浴したくなるほどのものです。泳ぎたくなるものです。そして、舟を浮かべたくなる、カヌーで漕ぎ出したくなる、という風につながっていくわけです。しかし、一番の原点は掬って飲みたくなる水。これは生命とつながっている。そして、掬って飲みたくなるためには、BODの数値をクリアーしただけではだめなのです。周りの「しっらい」が大切なんです。たとえば、澄んだ水の底にはきれいな砂利があり、岸辺には草の土手があるとか、岩が転がっているとか、滝のように水が落ちてくるとか。こういった清冽な水環境が、水を飲む気にかせるのです。問題はここですよ。水の「デザイン」を考えると、人は、人が全人格的に水と関わられるような環境条件を、大切にすることです。それを素直に受けとれるのが、子どもなんです。子どもには、余計な先入観がないからです。

子どものための水の遊び場は、日本でどのようにとらえられてきたのでしょうか。

進士 昭和の初めの児童公園には、徒渉池（としようち）というものを設けました。簡単に言うとしゃぶじゃぶ池。幼児が転んでもおぼれないように、非常に浅く作ってあります。池がないときは、水を貯めないで、舗装広場に集まっている子どもたちにホースの水をばあーっと掛けてやる。雨が降るみたいで、もう子どもたちは大喜びです。大正十二年に関東大震災があった。日

比谷公園の一部に日比谷児童遊園というものを作り、ネーチャー・スタディをテーマとした児童指導が始まるのですが、そこで徒渉池を造った。他に有栖川宮記念公園などに巡回指導を行い、そこでは、ホースで子供達に水を掛けてやる。公園化してから子どもに水遊びを与えたのはこういうやり方ですが、もっと昔は川や湖で遊んでいたはずですね。

古代日本人には豊かな水への イメージと遊び心があった

進士 少し、日本の水の文化史を振り返ってみましょうか。日本で水を使った庭園の記録の最古のものが、日本書紀にあります。路子工（みちのこのたくみ）という人が、飛鳥時代に皇居の南の庭に須弥山石（しゅみせんせき）を置いたとあります。仏教の世界観を表した石造物ですが、ところどころから水を吹き出す穴がたくさん開いています。また、男女の石人像の口から水が出るといって、噴水施設もありました。今も飛鳥資料館に行くことがあります。皇居でセレモニイを行う際、パーティ会場のデコレーションとして使われたのでしょうか。次に出てくるのは、蘇我馬子です。彼は嶋大臣（しまのおおのみ）と呼ばれたといわれています。嶋といつのは庭園のことで、テリトリーのこと。よくやくしが「シマ」っていうでしょう、あれと同じです。蘇我馬子の屋敷には池と島が造られていたので、そう呼ばれたらしい。当時としては、珍しかったのでしよう。なぜ島と池かといつて、一説にはこ

ういう考え方もあります。日本人は南方から瀬戸内海を通り、多島海風景を見て大和盆地にやって来た。それを表現したのが日本の庭園の始まりだというわけです。私の考えは少し違って、池は農業のために必要だったんです。水がなくてはだめです。弥生時代の稲作農耕にとって、水はすごく大切な存在だった。だから池を造って、そのあとそこに海の向こうの島を築いた、というふうには私は推定しています。その後の曲水庭園は、飛鳥時代に大陸から入ってきたものです。

飛鳥時代は、水と人との関わりが密だったのです。

進士 そつです。日本人の心象風景にある日本の原風景は、あちらこちらに湿地帯があつて無数のアカトンボが飛んでいた。池や沼も多かったでしょう。それからやがて稲作が盛んになって農村が広がっていく。だから水は生活用水として、また農業用水として、暮らしと密接に関わる身近な存在だった。それが、神社の中に象徴的に取り込まれ、神様の池になっていく。上高地というのは、もとは神池（こつち）だった。当時の人は神様は垂直的に天にいる場合と、水平的に海のかなたにいる場合と二通りに考えた。まず天にいるという見方。これはどついつとことかというところ、神霊が宿ると考えられた森や山を、神籬（ひもろぎ）といった。ご神木もその一種です。三輪山のように、山全体が神籬と捉えられていた場所もあった。天から神様が降りてくる

うう考え方です。もう一つは、遠く海のかなたにいますという考え方で、沖縄のニライカナイ（注4）のようになる。水平方向から神様が渡来したと考えたときのシンボルが、池です。実用的な農業のための池が、神社に取り込まれて神性を帯びたのではないかと思うのです。

それが平安時代になると、貴族の遊びの場として使われるようになる。舟遊式（しゅうゆうしき）といって、竜頭鷯首（りょうとうりゅうしす）の舟を浮かべ、鉦（かね）や太鼓を叩き、プラスバンドを乗せて舟遊びをするんです。京都の大覚寺横にある嵯峨院、大沢池などでやった。夏の京都は暑いからですね。それをこじんまりさせて町の中に作ったのが、池と遣水（やりみず）



を駆使した、寝殿造り庭園というものです。これが宇治の平等院に行くと、浄土曼陀羅の写しとして、阿弥陀様の前にある阿字池の形になるんです。このとき舟を浮かべるということは、あつたと思うんです。

ところが京都でも水に恵まれない立地に禅寺の書院などが造られるようになって、枯山水が生まれる。シンボリックな水の世界、つまり白砂敷きは海を表現する手段になる。海を表現するため砂を敷き石を立てて、池も内に島を作って、これが須弥山とか蓬萊とか方丈とか、神仙島を表現する。神仙島は海のかなたにある仙人が住んでいる島で、それによって不老長寿を表した。「流れに棹差す」と不条理を表現したり、生々流転と水を物的な存在から擬人化したたり、人生と重ねたりしながらとらえるようになるんです。西洋庭園にあるシヨーク（注5）とかサブライズ・ファウンテン（注6）といった、水の遊びや水の造園デザインはこれ以上発展しなくなってしまう。水泳だけは、武術として発展しますが、これは戦いのためで例外です。伊勢神宮の五十鈴川も、手水（ちようず）や蹲踞（つくばい）（注7）、といった身を清めるものとして機能させたのであって、遊ぶものではない。せいでい京都の詩仙堂の鹿おどしのように音を出して猪や鹿を驚す。また、算（かけい）という竹筒から水を落として、手水に受ける水の点景づくりといったところ。あとは庭園風景としての滝のように、池や流れを作っただけです。

水の遊び感覚が復活するのは、明治以降です。先ほどの日比谷公園の例をはじめ、

不忍池のボート場も早くから作られていました。大正の初め、御下賜になった井の頭公園では、池に飛込台が作られたりしました。

遊びと環境教育をめぐる社会 景観 造園家としての解釈

進士 近代以降の水とのつきあい方を見てみると、ボートや水泳のようなフィジカルなスポーツとしての水、次に噴水や池泉などビジュアルな園景要素としての水、それが近年はエコロジカルな生命の源泉としての水への関心が高まってきている。環境教育の視点から見た水というと、ここに行き着くわけです。水は生命の源だから、ピオトープの発想が生まれる。フィジカルな水ではプールに貯まっていれば、それで人は泳げる。死んでいる水でも構わない。では、水景、すなわちビジュアルな水はどうか。もちろんきれいなことに越したことはないのですが、底がコンクリートで水色のペンキで塗ってあつても、別に問題はありません。見た目は涼しげです。ところがエコロジカルということになると、生き物が生きて初めてエコロジカルということになる。生きた水でないと機能を果たさないのです。生物を息をさせる水でないとダメです。よく考えてみると、日本庭園はすべてそう造られていたのです。城下町を流れる上水もまた生活用水であり、農業用水であった。川は低い所を流れますが、上水は分水を流す必要があるの、高い所（馬の背）を流

します。玉川上水や野火止用水を、ご存知でしょう。川と上水は風景が違います。ただ、一番大切なことは、水源から下流まで一貫してきれいな水だった。生き物が棲める水だったということです。現代になると、水を資源として管理するようになる。ここから問題になるのです。資源ということになると、一滴の無駄もなく管理しようとするようになる。農業用水を工業用水に転換すべく、農業用水の水利権を工業用水として売るつとにする。水が蒸発したり地中に染み込んだりすることを、もったいないと考えるようになって、水をパイプを通す暗渠にした。これは、生命を追い出すことです。このことが環境破壊につながっていった。昔の用水は素堀りですから、周囲に漏れた水が田んぼに入ったり、まわりに樹木を育てたりしたのです。だから、玉川上水はあれだけの雑木林を育てられたのです。樹冠ができ、鳥が集まり、生命の回廊へと発展したのです。だから、まさに環境保全緑地になっているのです。

水とのつきあいを環境教育の観点からとらえ直すためには、どついたらよいでしょうか。

進士 水質だけを問題にするのを、そろそろやめるべきでしょう。濁った水でも、生物は生きることができ。例えば、ドイツ。アウトバーンの例を言うと、高速道路の路面排水を、土手の脇の下に落として池を造っています。道路の法面（のりめん）の下に水たまりができるのです。そこに蛙とお

たまじゃくしが棲むようになり、それを狙って捕食者が集まってくる。その場所に食物連鎖が生まれるのです。アウトバーン沿いのこんな森や池がなくなると、国全体にビオトープネットワークができます。日本でも、近年これをやるつとしています。生き物を育む水を取り入れていくつとということ。やつかいなのは、ここで、アメニティとセキユリティの問題が発生するわけです。アメニティからいうと、水景は絶対必要だ。しかし、現代の子どもたちにとっては、ある程度深い水は危険です。セキユリティが大事だからといって、アメニティを排除するわけにはいきません。たとえば、日本庭園では沢跳びというものがあつた。これは水に親しむつとらえの一つです。池の中の飛び石が危ないといつて、近年では柵をつけているのです。こんな馬鹿なことはいけません。庭園の風景としての飛び石は、そこを渡ること水の中に入つたような気分させるためにあるのです。飛び石は、それに載つて一歩ずつ歩を進めることによつて、そのような気分をさせていくのです。ほんばん飛んで歩くためのものではない。歩くだけなら、舗装道路でいいのです。そんな文化の基本さえも忘れてしまつています。

ヨーロッパなどでは、池のそばに浮輪を置いて落ちたら拾えという考え方です。環境教育は、自分の身の安全は、自分で守るという発想を教えること。安全、安全といつて、なんでも柵を付けられたいといつものではない。これからの課題は、水とつきあつていくつとを、日本の文化として

考えなくてはいけないし、その前で環境教育として考えなくてはいけない。人間が生きること水との関わりとは何か、私のいうトータル環境空間に、本当の水を取り入れていくために、いかに取り組むべきかだと思つています。そうすると、最後は今の都市構造を問わなくてはならなくなる。

そうした観点からすると、今のビオトープは生態学的な視点に偏つていくつとにも思えますね。

進士 その通りです。低温、低温のドイツなどのビオトープのやり方を、そのまま持ってきたのでは数になつてしまつたかもしれせん。自然を生かしたつとも手を入れながら、美しく自然を維持した伝統的日本庭園こそ、まさに日本型ビオトープですね。

過去五年間の新聞記事にある、「遊び」に関連する記事をご覧になつてどつと思われませんか。

進士 一見、遊びの種類が多彩に広がつていくつとに見えますが、結局は、道具を介しての遊びでしょう。多様化しつとも、ほとんど人為的な狭いものに向かつているつとに思つています。むしろ行為だけ楽しむのではなく、風景を含めて環境を楽しんでほしいですね。たとえば、釣りだつて昔の中国の文人画に描かれたように、詩を詠み、画に描くといつた具合の、環境そのものを味わつたつと釣りに発展できれば、余裕があつていいなと思つています。どんな大物が

釣れるかとか、何匹釣れるかという、スポーツ的な釣りではなくてです。

トータルな環境観なんて、もう誰も持っていないつとですね。海水浴場だつて、昔は砂浜、松原がセットでしたよね。今は、海の横にプールを造つてそこで泳ぐ。目的にしか感じない、感度の悪い人間が増えつた。これからは、機能として特化した水環境を考えるのはためなんです。人間が生きていくつと関連して水に敬意を表し、多様な要素を持つた水の空間をトータルに感じないと、人と水との多様な関係は広がつていかないと思つています。



- (1) スペースとブレイス 場所を単なる空間（スペース）ではなく、そこに生きてきた人の経験や歴史がつまつた「生きられる場所」（ブレイス）としてとらえようとする見方
- (2) 等々力渓谷 東京二十三区内で、唯一の渓谷と言われている。世田谷区内、国分寺崖線の南端に当たり、滝、湧水もある
- (3) BOD Biochemical Oxygen Demand 生物化学的酸素要求量の略。水がどれだけ汚染されているかを表す指標で、微生物が水中有機物をきれいにするまで酸化分解する際に必要とされる酸素の量
- (4) ニライカナイ 奄美、沖縄で、海のかなたや地底にある常世国（とこよのくに）と、信じられている聖なる他界
- (5) ジョーク 西洋庭園で行われた、水の造園デザインの一式。座ると水が吹き出すなどして、人を驚かせる
- (6) サブライズ・ファウンテン 同じく、人工的に雷の音をたてたりして、人を驚かせる噴水の様式
- (7) 蹲踞（つくばい） 身体をつくばいして手水を使ったつと、自然石製の水鉢。低い位置に据えられている。

news storys of water

【水から見る遊びと教育の風景】に関する新聞記事

1980年代後半から、水に関わるレジャーは多様化してきました。自然環境に触れることの意義も強調され、環境体験が遊びと融合し、「水」に見る遊びの風景もより活発化しました。中でも、釣りやダイビング、カヌーの人気の盛り上がりは特筆すべき現象でした。

人気が増えれば、愛好者が殺到し、生活の場として暮らしている方と軋轢が起こります。釣り人と漁業者、釣り人とカヌーイスト、プレジャーボートの不法係留など、愛好者と生活者、あるいは愛好者同士の対立が生じました。こうした対立に対して、漁業者とダイバーやサーファー

が協調しながら海辺を守り、地域を盛り上げていこうという動きが生まれる事例もあれば、湖の生態系を変えてしまうような釣り人が生まれE (Ecology) の視点が無視される例もあります。遊びの楽しさを広めるも狭めるも、双方のC (Community) の視点の持ち方次第といえそうです。

また、遊びは、子供たちにとっても環境学習の絶好の機会となるものです。水族館も体験を重んじるプレゼンテーションの場となり、鯨やイルカウォッチングも高い集客力をもった環境教育資源となっています。身近な水辺でも、遊び感覚で様々な環境教育が行われているようです。

ご紹介するのは、データベース化した水に関する新聞記事より、朝日、読売、日経、日経産業の記事の一部です。どの記事も要約されたものです。

【ミニシアターと学習体験】

発想の転換で集客、水辺再現型「地方に浸透」水族館で展示内容や見せ方に工夫を凝らす動きが広がってきた。鳥類や爬虫類など、これまでの水族館の領域を超えた生物を展示するケースが増加。魚の生態を学ぶ環境をそのまま見せる「生態展示」も各地で導入が進み、地域の特徴ある水辺の様子を再現している。大都市の大型館がリードして始まった水族館ブームが一段落する中、各施設はより個性的な展示で入館者にアピールしようとしている。神戸市立須磨海浜水族園で十一月下旬、水族館には珍しいインドクジャクのペアがお目見えした。同市立王子動物園から譲り受けたもので、リスマスズメのいるパドケージに仲間入り。今まで水族館にクジャクが、と客に意外性を持たせることと、展示効果を狙った」と展示部長の房安昌志さん。今年四月に改装オープンした東京・東池袋のサンシャイン国際水族館は、水族と植物、鳥類、爬虫類との「混合飼育」による展示を新たな売り物にしている。大都市の大型水族館などが先駆けとなった生態展示が、地方の施設にも浸透している。今年七月、福岡・大牟田市にオープンしたテーマパーク、ネイブルランドの水族館は、隣接する有明海をテーマにしたコーナーが目玉だ。魚を水槽に泳がせておけばいい」との発想を変え、生態展示や動物園との展示物のボーダーレス化を進めてきた水族館。今後、「何をどう見せるか」という工夫が集客のカギになりそうだ。

水族館の裏側をのぞいてみよう。

(一九九五年十一月十日 日経)

横浜市にある八景島シーパラダイスで、学校の休みを利用して「水族館の裏側探検」が行なわれています。海の生き物を飼育する大切な仕組みを、機械室や治療室、工場の調理室など、ふだん見ることのできない裏側を探検。実際にエサをやったりして、水族館の仕事も体験しています。

(一九九六年二月十八日 読売)

江戸川が流れ込む東京湾の三日目干潟で二十四日、生物観察会が開かれた。葛西臨海水族園による。

(一九九七年五月二十五日 朝日)

干潟は天然の浄水場。東京湾で一九九五年から年一回のペースで干潟観察会を開いている葛西臨海水族園(東京都江戸川区)は、「干潟にすむ生物たちは、よくれた水や有機物をこし取る浄化槽の役割があります」と、干潟の大切さを市民に訴えてきた。

(一九九七年六月十一日 朝日)

ぼくたちの水族館だ。首都圏の子供たちが、神奈川県三浦半島の海岸で磯の生き物を採集、東京・池袋のサンシャイン国際水族館に、手づくりの水族館を作りました。水槽づくり、説明板製作、飼育まで、作業はみんな子供たちです。キッズ・アクアリウム(子供水族館)は、三十一日まで無料で開いています。

(一九九七年八月十七日 読売)

スコール体験 千種類約四千五百本の熱帯植物が茂る、夢の島熱帯植物館」では、夏休み期間中の土、日曜日、ジャングルでのスコール体験をしてもらおうと、温室内に散水機を使って雨を降らせている。

(一九九七年八月三十日 朝日)

スリル満点！サメと遊泳、ギョ

ッ！サメだ。でも、ご心配なく。これは、南アフリカ・ケープタウンにある「ツィ・オーシャンズ水族館」が、一般ダイバーを対象に始めた企画で、場所は同水族館の大型水槽の中。スキューバダイビングの資格さえあれば、だれでも体験でき、怖いもの見たさも手伝って、静かなブームを呼んでいる。

(一九九八年一月二十八日 読売)

【釣り】

スポーツフィッシング派急増、えさ釣りと共存が課題に。箱根・芦ノ湖、場所分離で摩擦防止。急速に愛好者を増やしている「スポーツフィッシング」の釣り場を、従来の「えさ釣り」の場と区分けする制度が今春から、神奈川県箱根町の芦ノ湖で導入される。釣り客同士のトラブルを防ぐ苦肉の策だ。しかし、スポーツフィッシングとえさ釣りの間には、根底に、釣りに対する「思想」の違いがある。釣り評論家の服部善郎さんは言う、「日本人にとって魚は食文化の象徴。多くの魚を釣って、食べるというのが伝統的なえさ釣りの発想だ。一方疑似餌釣りは、魚をあまり食べる思想のない欧米流の釣り。何をどれだけ釣るかよりも、いかにして釣るかという経過を楽しむことに目的がある」実際、ルアー釣りに釣った魚はその場で放し、何回も釣ることを楽しむ「キャッチ・アンド・リリース」が定着している。日本釣振興会の三川原副二事務局長も、「釣りの発想が全く違つたから、混み合う釣り場を分けるのはある程度仕方ないこと」と理解を示すが、「これは互いのルール作りの第一歩。まだまだ改善すべき点は多い」と提言する。

(一九九六年一月七日 読売)

東京・東上野に「釣具のあゆみ資料館」がオープンした。国内だけでなく外国からも集めたさお、糸、リール、針など千点の釣具を展示し、それぞれの変遷をたどることが出来る。垂糸で作った釣り糸、鯨のひげで作った釣りざおなど、珍しい道具には手づくりの温かみを感じられる。創設者の一人で東京釣用品協同組合特別顧問の常見保彦さんは、「大量生産の現代の釣り具によって減りつつある伝統的な釣り文化を後世に伝えたい」と話す。

(一九九六年四月一日 日経)

海にもブームの波。釣り場・魚種幅広く。初心者多くマナー課題。ルアー(疑似餌)やフライ(毛ばり)釣りといえは渓流や湖が通り相場だが、最近、海で楽しむ人が増えてきた。東京・臨海副都心でスズキやボラを釣ったり、伊豆でカンパチを狙ったりと、釣り場も魚種も幅広い。釣り具メーカーや専門店もブーム到来を見込み、海用ルアー・フライ用品の取り扱いを増やしている。

(一九九六年五月二十五日 日経)

世界アユ釣り大会。清流の多い岐阜県は、年間六十万余のファンが訪れるアユ釣りの本場でもある。そこで日本古来の伝統漁法「友釣り技術」の伝承と、釣り人のマナー向上を図ろうと、岐阜県漁業協同組合連合会が首領を取って始めた。八回目の今年は、七月二十四日に飛騨川支流の白川で開かれる。

(一九九六年六月十四日 朝日)

ブラックバス。一種で、北米産のコクチバスが日本に持ち込まれ、長野、滋賀など五県、十カ所の湖沼に生態圏を拡大していることが、水産庁の聞き取り調査で分かった。す

テーマ4 水から見る遊び、教育の風景

日本に定着したオウチバスより機敏で、冷水域でも生息できることから、湖沼だけでなく、渓流の生態系にも深刻な影響を与える恐れがある。三十三県がブラックバスなどの外来魚の放流を禁止しており、水産庁は、違法放流は摘発するよう都道府県に求めている。

(一九九六年六月十七日 朝日)

首都圏の水がめ、群馬県水上町の矢木沢ダムで、濁水で干上がった貯水池(奥利根湖)の湖底に若者や家族連れがRV車で続々と乗りこみ「違法駐車」している。奥利根の秘境の釣りの穴場としてその魅力が口コミで広がったため、同ダムを管理する水資源開発公団沼田総合管理所が禁止しているキャンピングカーやオートマで楽しむケースも、同管理所は「何か事故が起きたら」、「こみでダムが汚される」と心配しながらも、「親水」キャンペーンを展開している手前、強行措置を取らず、対応に苦慮している。奥利根湖にコンピの袋が浮かび、空き缶も捨てられるなど、「ごみ公害の被害がじわじわと出始めている。

(一九九六年八月十七日 読売)

海と川のマナー向上へ新制度。釣り指導員に上級コース、技術や環境保全を伝授、「名人級」は試験敬遠。名人と上級者、どちらが釣り上手?アウトドアブームで釣りファンが増える中、釣り団体が主催する指導員の資格制度に、新たに上級コースが加わることになった。海川でこみ捨てるなどの苦情が絶えないため、釣り人へのマナー指導を強化するのが目的だ。補助金を出す農水省は五年間で五百人の育成を期待しているが、「名人級」たちの間では、「もし落ちたらメンツが丸つぶれた」と、試験そ



のものを敬遠する向きもある。「釣りインストラクター」の資格制度は約十六万人の釣り人が加盟する全日本釣り団体協議会(東京都千代田区)が「釣りの健全な発展と自然環境の保全」などを目的に掲げている。釣り技術と理論、漁業関連法令や気象マナー指導の手引きなどを盛り込んだ講習と、筆記と実技、面接の試験を受ける。合格すると、釣りの技術や、針や糸による野鳥の被害防止のマナー、環境保全の指導などをする。

(一九九六年九月七日 朝日)

東京都と埼玉県の境に広がる都水道局村山貯水池と山口貯水池。水道水の安全と水質を確保するため、周辺の保水林を含めて立ち入り禁止になっているが、フェンスを乗り越えたりベンチで穴を開けたりして湖畔に侵入し、釣り糸を垂れる釣り人が後を絶たない。都も有効な対策がなく、釣り人のマナーに頼るしかないのが現状だ。

(一九九六年九月二十八日 朝日)

釣り・料理で観光PR。検原漁協退治できぬなら利用。奥水産課・他

の漁協、川伝いの拡散懸念。湖のキヤング」と悪名高い外来魚ブラックバス、ワカサギやエビなどを食べるため害魚の代表格にされているが、東北の景勝地、真磐梯の検原湖(福島県)では、駆除を検討していたはずの地元漁協が「もっと増やしたい」と方向転換した。渋い顔の行政側に対して、漁協は「釣りと料理を売り物に地域おこしを」と熱い視線を注ぐ。当のブラックバスも目を白黒させそうなる人間界のバス騒動を追った。全国では駆除派が主流、放流の稚魚に被害。

(一九九六年十月十三日 日経)

ルアー釣り用品。若者を中心に流行っているルアー釣りに、水中で微生物によって分解されるルアーや釣り糸が登場した。ブームの過熱で、使い捨てのルアーが魚の体内に残ったり、釣り糸が水取りに絡まったりする事故が相次いだことがきっかけ。ルアー釣りの環境への悪影響に手を焼いていた釣り場もこうした動きを歓迎し、漁協が商品の改善に協力するなどの動きが出始めている。発売したのは服飾・履物資材会社のモリト(大阪市中央区)。水と食品添加物を素材にして作り上げた。東シは生分解性の「脂肪族ポリエステル」製の釣り糸「フィールドメイト」を発売した。バクテリアが糸を分解する仕組み。

(一九九六年十一月三日 日経)

冬場はもろろん、一年中ルアー・フライで釣りが楽しめる「管理釣り場」が、自然の渓流の釣り解禁日を待ちわびる釣り人たちにぎわっている。人工の湖沼や川の一部を区切ったエリアにマス類を定期的に放流しており、自然の渓流に比べると魚影が格段に濃い。女性客も増えてい

る。神奈川県津久井町の「リヴァースポット早戸」。相模川水系の早戸川の一部を区切ったルアー・フライ専用の管理釣り場だ。専門誌「アングリング」(広済堂出版)編集部によると、自然の渓流を利用した管理釣り場は少数派で、人工の池や湖を使った釣り場が、近年急増している。

(一九九七年二月七日 読売)

湖や沼に生息するブラックバスを小魚の形をまねて作ったプラスチック製ルアーを使って釣る「バス釣り」が若者に大人気だ。「カッコいい」と女性にも注目され、ルアーのコレクションや海でのルアー釣りにまで広がりをみせ始めた。一方で、捨てられた釣り糸が水鳥に絡まるといった環境問題への対応も迫られている。昨年十一月山梨県の河口湖で開かれたバス釣りトーナメント。全国から集まった約二万三千人が一メートル間隔で並んだところ、湖畔をぐるりと一周してしまっただ。

(一九九七年三月十五日 日経)

インターネットサーブिस人気。インターネットで釣り場の情報を提供するサーブिसが人気を集めている。事後報告になりがちな専門雑誌と異なり、いきの良情報売り物だ。過去の実績と最新の気象情報を分析し、「大漁日」をスバリ予測するサーブिसも登場した。ベンチャー企業のナンバアイ(神戸市)が運営する釣り情報のホームページ「MAMB O O(マンボイ)」。既にアクセス件数は七万件。約六千人の会員数を誇る日本最大の釣り競技者団体。全日本サーフキヤスティング連盟に協力を要請。年間約六万匹のデータが集まる予定だ。気象情報サーブिस会社のウエザーニュースは、得意とする地域を絞った天気予報や衛星を使っ

た海流の温度変化地図を武器に、ネット上で釣り雑誌を創刊した。

(一九九七年七月十九日 日経)

釣り、女性・ファミリーとらえる。ただ、捨てられる釣り糸だけがをずる鳥が後を絶たないなど、新米太公望のマナーも課題になっている。釣りは、ゲームの分野でもブームになっている。マナー問題、鳥傷つける釣り糸放棄。

(一九九八年六月二十日 読売)

「スポーツ」としての釣りが、定着しつつある。釣り上げた魚に舌鼓を打ったり、隣近所におすそ分けしたり、といった今までの釣りとは違ったスタイルの釣りだ。釣り人はルールに従い、戦略を立て、魚との戦いを楽しみ、魚は放流する。

(一九九八年八月二十九日 読売)

東京大学で今月から、ヘラブナ釣りを学問として研究するユニットなゼミナールが開設した。ゼミの名称は「ヘラブナ釣り 日本独自のスポーツ・フィッシング」。教養学部の二年生を対象にした全学自由研究ゼミナールの一つとして開かれており、釣りの初心者を中心に二十人の学生が受講している。

(一九九八年九月十一日 読売)

【ダイビング】

やっています。面白スポーツ。ネーチャーシユノケリング、静岡・南伊豆町。ボンベ不要の海中散歩。シユノケルを使って浅い海を泳ぎながら、海中の生物や岩などの自然を観察、探検する楽しいスポーツ。夏向きの、海のウオークラリーといったところが、ウエットスーツとフィッシュ、水中マスクをつけ、シユノケ

ルで息をしながら海中を散歩する。

(一九九六年六月七日 朝日)

ダイバーの入海料。漁業不振、レジャーに「網」。あいまいな「権利」、法的には任意の支払い。海はみんなのもの。潜るのになぜお金を払わなくちゃならないの。伊豆半島の沖でスキューバダイビングをしてきたという探偵見習の高井田子は、有料なのが納得できない。調べてみると、複雑な権利関係が浮かび上がってきた。「入海料?ウチは徴収代行しているだけ。お金は漁業権を持つ地元漁協にそのまま渡すんだよ」。漁業権は、漁業法に基づき漁業を営む権利のことです。「ダイバーを積極的に受け入れている漁協もあるらしい。ダイビングで漁村を振興しようと、会社を設立したり、自らダイビングサーブिसを開業する漁協が出てきた。」(一九九六年六月十五日 日経)

海底遺跡を守るダイバーの輪。佐賀県唐津市の景勝地「七ツ釜」。その海底には弥生時代から江戸時代の土器や陶磁器が散乱する。大陸との交流にかかわる物もあると見られている。この水中の遺物を守るため、ダイバーたちが活動を始めた。地元でダイビングのガイドをする浪口志郎さんは六年前に初めて白蠟わんを発見し、これまでに二十五点を引き揚げた。保存の必要性を感じ、市教育委員会に働きかけ、今年一月、この場所は遺跡埋蔵地「七ツ釜海底遺跡」として認められた。福岡市の海底遺跡を調査した九州・沖縄水中考古学協会「の林田憲三会長は「もっと海の中の遺跡に目を向けてほしい」と訴える。(一九九六年十月十二日 日経)

ボンベを背負って潜水するスポーツ、スキューバダイビング。日本で

の愛好者数が七万人に達した模様だ。二十代が新規ダイバーの中核となり、なかでも女性の増加が目立つ。海中開発技術協会の調査によると、八六年末に六万一千人に過ぎなかったダイビングライセンス(エントリーレベルカード)保持者数は九五年末には六十二万七千人にまで急伸した。海外取得者も加えた日本のダイバー人口は六十五万人と推定され、昨年末には七万人に達した模様だ。

(一九九七年 月六日 日経)

ダイバー五千人が海中のこみ拾い。二十日、「海の日」に、ダイバーが全国規模で海岸清掃に取り組むのは今回が初めてという。この水産環境保護キャンペーンは、ダイビング教育・指導を手がけるパティジャパンが全国のダイビングショップ、観光協会、ダイビング機材メーカーなどに呼びかけて実施する。

(一九九七年七月十七日 日経)

二十日の海の日を前に千葉県山手市の漁協などが同市佐間沖の海底に鳥居やさい銭箱を設置、十九日に海難事故防止を祈願しておはらいをした。「海底神社は日本で初めて、ダイバーの新しい名所になれば」と期待していた。

(一九九七年七月二十日 日経)

肺は圧縮、心拍数も激減。海底の心地よさ、魅力的。素潜り世界チャンピオンのウンベルト・ペリツァーリさん。息を止めた自力で潜って浮上する素潜り競技「コンスタント」のチャンピオン。九月十三日、地中海はイタリア・サルデーニャ島の沖合で自分の持つ世界記録を更新した。水深七五メートル。海に入ってから一分十一秒後、その深さを証明する札を手に戻ってきた。

(一九九七年十一月十三日 朝日) 全国の水産高校生がスクューバダイビングの技能を競う初めてのコンテストが茨城県ひたちなか市の同県立海洋高校で始まった。

(一九九八年八月二十一日 朝日)

水の下は潜水ラッシュ。知床半島にダイバーたちが集まっている。平らな流水原にチェーンソーで穴を開ける。寒冷地用の装備を身につけて零下二度の海水に、ロープをつけて入っていく。

(一九九九年一月二十八日 朝日)

新学習指導要領案の中の専門教科に関する水産の部門で海を取り巻く変化に対応するため「ダイビング」の科目を設置。

(一九九九年三月二日 朝日)

【トレッキングウォーキング】

水辺を歩くことが、人気だ。水の文化に触れる機会にと、建設省もく



つるげる水辺づくりに取り組む。四月には学会が発足する。「みずウォーク'97」の季節の到来だ。河川の浄化意識高揚も。歩くことにこだわった「日本ウォーキング学会」が誕生する。初代会長は四月から東洋英和女学院大教授に就く宮下充正さん。事務局の日本歩け歩け協会(東京・千代田区)の飯島巖・常務理事は、「学会の設立をきっかけに、ウォーキングが国民運動にまで広がれば」と期待している。

(一九九七年三月十六日 読売)

西多摩の豊かな自然にふれながら夜を徹して歩く「秋川渓谷夜明け歩き」(同実行委員会主催、朝日新聞社など後援)が、七月十九日夜から二十日朝にかけて、あきる野市などで開かれる。

(一九九七年六月二十四日 朝日)

【鯨・イルカウォッチング】

くじら人気再び。高知県大方町の遊漁船主会は、今年のホエールウォッチングの参加客数(シーズンは三十月)の目標を、前年比三五%増の二万五千人に決めた。阪神大震災の影響で九五年は同十三%増と八九年の事業開始以来、最低の伸び率だった。鯨を楽しく、安全に見るための入門講座を開催するなど集客力向上に全力を挙げる。

(一九九六年二月十六日 日経産業)

野生のイルカが見える。ウォッチング船あすから運航。千葉県・犬吠埼の港を出一時間半。犬吠埼鯨類資源研究会の代表、宮内幸雄さんが海を指しながら、「右、右、ほら後ろだ」と大声をあげた。跳びはねるイ

ルカの群れだ。イワシ漁などの漁港として有名な銚子市の沖合。野生のイルカを紹介したいという男の夢がこの春、かなった。時には数百頭にも上るイルカの大群は、首都圏にも雄大な自然があることを教える。そのウォッチング船が、あす六日から運航を始める。宮内さんは灯台近くにある水族館「犬吠埼マリナパーク」で飼育するイルカを調教している。六日から始まるウォッチング・ツアーは、十月末までの予定。水族館が今年購入した十二トンの旅客仕様の船(十二人乗り)で銚子市の外川港を出て、約二十〜三十一キロの海域でイルカやクジラを追う。所要時間は四時間で、イルカ遭遇率を七割と見込む(一九九六年四月五日 読売)

クジラと過(こ)す夏、南紀海岸。和歌山県那智勝浦町の沿岸で、全国から訪れたホエールウォッチャーたちは、尾ひれを振り上げて潜る姿を見たり、海中での鳴き声を水中マイクで聞いたりしてクジラとの触れ合いを楽しんでいる。

(一九九七年七月二十四日 朝日)

船の接近百メートルまで。小笠原の海では今、ホエールウォッチングが真つ盛りだ。商業捕鯨の全面禁止を受けてスタートした観光事業も十年目を向かえ、年間三千人を超すウォッチャーでにぎわっている。同時に、クジラの生態系への影響に配慮し、クジラと観光船との距離を従来の二倍にする新しい自主ルールもつくられるなど、主役との永永共存を目指した取り組みも進んでいる。

(一九九八年四月九日 読売)

鯨が見られない場合には帰国後に六千円を返金します。日本旅行はホエールウォッチング付きのハワイの

パッケージ旅行に「クジラ補償」制度を導入する。

(一九九九年一月十日 日経産業)

【環境教育】

雪の多摩川、サケ稚魚放流。世田谷区玉川の多摩川河口敷で十八日、サケの稚魚放流が行なわれた。「多摩川サケの会(倉橋良雄会長)」が一九八一年から行っている恒例の行事。

(一九九六年 月十九日 読売)

足立区の四つの小学校の児童たち五十人が、荒川の生き物の「里親」になった。「荒川の自然を守る気持ち」を育てたい」という同区水と緑の公社の企画で、十六日、荒川千手新橋緑地に集まり、投網でエビやボラ、八ゼなどを捕まえる様子を観察。そのうち約五十匹のテナガエビを各学校に持ち帰ってみんなで育てて荒川に放流する予定だ。この場所には、ワンド(生物が育つのに適した入り江)を中心に、ヨシ原を復活させた多自然型公園が完成している。

(一九九六年三月十七日 朝日)

隅田川の流域九区でつくる浄化対策連絡協議会が、川の環境をテーマにした小学生向けの冊子「川のてっぺん研究」を作成、無料で配布を始めた。同協議会は、中央、台東、墨田、江東、北、荒川、板橋、練馬、足立の九区をメンバーに、各区内を流れる隅田川や支流の新河岸川、石神井川、白子川の水質浄化に協力して取り組んでいこうと一九七八年に設立された。毎年、合同で水質調査を実施しているほか、川への関心を喚起するための冊子を作っており、今回は、小学校高学年を対象に一万四千四百部を発行した。

(一九九六年五月十四日 読売)

海や川を浄化するには住民一人一人の心掛けからと、あちこちで、活動が始まっている。神戸市にある第五管区海上保安本部では紙芝居などを使って、子供たちへの環境教育に乗り出した。紙芝居で、海の浄化を呼びかけているのは、大阪海上保安監部警備救難課の大待雄治郎さん。大阪湾に注ぐ川の上流に住む一郎くんが、遊びで川に向かって投げた空き缶が、海に流れついて、清掃船に拾われるまでを描いた物語。

川村学園女子大の音藤哲郎教授らが昨年、関東や東北の二千二百余人を調査して分かった。海や川で魚釣りをしたことのない子供は二十%から三十六%に。子供らにもう一度水遊びの楽しさを、建設省が水辺の「学校」ならぬ「楽校」プロジェクトを発足させた。地元と協力し、水遊びのできる川作りを目指そうというのだ。とはいえ、怖いのはやっぱり事故。基本は、子供たちを危険から守る地域住民やPTAの輪だ。経験豊かな、川の達人を、遊びの指導者に委嘱する計画もある。

(一九九六年八月二十日 読売)

コーラ使えば川や池の汚れわかる。小中学校の教材にも。簡単な装置で測定。高価な調査液の代用に、川や池の水の色を、コーラを使った簡単な装置で測れる方法を、都武蔵調布保健所の人見達雄さんが開発した。きっかけは、昨年夏に狛江市で開催した子どもたちのサバイバルキャンプで、目の前には多摩川の水を飲めるようにしたい」と、相談を受けたことだった。そこでペットボトルの上部と、底の部分を取り、口のついた部分にティッシュペーパーを巻いて逆さにし、上から水を注いで濾

(一九九六年九月二十八日 朝日)

こら使えば川や池の汚れわかる。小中学校の教材にも。簡単な装置で測定。高価な調査液の代用に、川や池の水の色を、コーラを使った簡単な装置で測れる方法を、都武蔵調布保健所の人見達雄さんが開発した。きっかけは、昨年夏に狛江市で開催した子どもたちのサバイバルキャンプで、目の前には多摩川の水を飲めるようにしたい」と、相談を受けたことだった。そこでペットボトルの上部と、底の部分を取り、口のついた部分にティッシュペーパーを巻いて逆さにし、上から水を注いで濾

テーマ4 水から見る遊び、教育の風景

過する「簡易浄水装置」を考えついたら、この装置で多摩川の水をこすと、黄ばんだ色が残る。都市河川水に共通の現象だ。水道水の色度調査に必要な標準液は入手しにくい上に高価なため、小、中学生でも簡単に使えるものがあれば、環境教育にもなると検討を始めた。しょうゆやコーヒーなど身近にあるものを次々にテストした結果、コーラに行き着いた。(一九九六年十一月七日 朝日)

山林や河川など自然に触れる機会の少ない都会の小中学生に水の旅を体験してもらおうと、建設省は、水源から家庭の蛇口までの水道水の流れをたどる旅行を実施することになった。同省では今年度から、全国の河川敷を水との触れ合いが楽しめる親水空間とする「水辺の楽校」プロジェクトをスタート。さらに文部省と共同で、河川や海で水遊びをする時の注意点や遊び方の事例紹介など水辺の体験学習のノウハウをまとめたガイドブックを今年度中に作成することとしている。「水の旅」もこうした取り組みの一環で、家庭の蛇口から水の流れをさかのぼり、浄水場や河口堰、ダム、水源地などを見学する。来年度からのスタートを目指して、モデル校や旅行コースなどを詰め、順次拡大していきたいとしている。(一九九六年十一月二十日 読売)

「朝日・海への貢献賞」を受けた米の海洋生態学者シャック・モイヤーさん。米国・カンザス州の生まれだが、豊かな自然に魅せられて三宅島に住み着いた。今年、創設された「朝日・海への貢献賞」(朝日新聞社主催)の「ふれあい学習賞」を受賞した。鳥を足場にした海の生き物の研究は四十年以上。三宅島自然ふれ

あいセンターの環境教育顧問を務める。(一九九六年十二月八日 朝日)

シギやチドリなどの野鳥を観察するだけではなく、鳥たちのえさ場や休息所になっている干潟や湿地の保護に参加しませんか。都立東京港野鳥公園(大田区東海)は、園内の干潟や湿地で観察や草刈りをする「干潟ファンクラブ」の会員を募集している。(一九九七年五月二十三日 朝日)

隅田川下流の東京商船大学構内(江東区越中島)で十四日、地元の子どもたち約百三十人がサケの稚魚五千匹を放流した。サケの放流は今年で十四回目。子どもたちの環境教育のために、区内で結成された「隅田川鮭の会」(柳沢弘道会長)が、一九八五年から毎年この時期に実施している。(一九九八年二月十五日 読売)

自然の営み子どもと共に。「森の中では豪雨でも濡れない。木々は光も求めて枝を伸ばしているんだ」。都立隅田川高の永宮友子さんは二年生だった昨年七月、同級生と埼玉県大滝村の演習林での合宿に参加して感じた。近くに荒川など河川が多い同校は水質調査を授業に取り入れている。合宿はその仕上げだった。「森が水を守り、水が森を育てることを実感させたい」と引率した早崎博之教諭はその思いが伝わり始めたと感じた。東京学芸大学の大学サークルから発展した自然文化史研究会。研究会は一九九一年から活動の場所を大滝村中津川に定めた。地域の巨樹などを展示品に見立て、地区はエコミュージアムと考えている。(一九九八年四月九日 朝日)

目黒区立田道小学校のプールで十

六日、子供たちが水生昆虫採集を楽しんだ。区内にはこうした「水たまり」が少ないため、身近な自然を学ぶいい機会だと、昨年からは生活科の授業に組み込んだ。(一九九八年六月十七日 読売)



身近にある海ともっと親しくなろう。神奈川県茅ヶ崎市の市立東海岸小学校で「渚の集会」が開かれ、全校児童が砂浜を掃除し、砂の彫刻を作りました。集会は、環境を守ることに協力して作業することの大切さを学ぶために、毎年行われます。十人以上続く伝統行事です。(一九九八年七月十九日 読売)

宮城県で、小学生が水田を教材に「環境」を学んでいる。稲刈りなどの実体験だけでなく、遠く離れた学校からパソコン通信で、「きょうの田んぼ」を観察。刻々と変化する水田の水質、稲の育ち具合、そしてミジンコなどの微生物の様子に目を見張った。(一九九八年十月十八日 朝日)

大田区立立新井第四小学校の子供たちが自宅や学校でふ化させたサケの稚魚約三千匹を多摩川に放流した。環境保全と自然との共生の大切さを

理解してもらおうと、昨年からの取り組みであり、今回で二回目。(一九九九年三月二十一日 読売)

生物のすみか、復元に挑む。生物のいる池や川を守り、失われた自然環境を取り戻す運動をする人の資格「ピオタープ管理士」が昨年誕生した。ピオタープの意味は、ドイツ語で「地域の野生生物が生息・生育する空間」。環境保護を目的とする非政府組織(NGO)、日本生態系協会が認定する民間資格だ。(一九九九年三月十六日 日経)

【プレジャーボート】

不法係留ボート、都 強制撤去を中止、受け皿の整備が必要。埼玉県境の足立区を流れる新芝川に不法係留しているプレジャーボートの強制撤去を予定していた都は十四日

すべての船が自主的に移動したとして、強制撤去は中止する」と発表したが、(一九九六年五月十五日 朝日)

プレジャーボート、「遊び方」がいつばい。水上キャンプ・スキーけん引・釣り…。三十一、四十代が主流。係留問題も浮上。マイカー感覚でモーターボートなどを購入し、クルージングを楽しむ人たちのすそ野がここ数年、広がってきた。こうしたプレジャーボートでの遊び方も多様化水上スキーやダイビングなど本格的なマリンスポーツ派もいれば、水上キャンプとしゃれこむ家族もいる。ただ不法係留も大きな社会問題となつてきており、使う側のモラルが問われている。消費・生活行動に詳しい三菱総合研究所主任研究員・三浦展氏は、特に四十代でプレジャーボ

ート人気が高まっていることについて次のように語る。「彼らの少年期だった一九六〇年代のあこがれといえは米国西海岸であり、加山雄三の『若大将』。人気の裏には、当時抱いていた夢をやっと実現させようとしている人も少なくないのではないかと」(一九九六年六月十日 日経)

不法係留七五%。都内河川、ルール無視野放し。中でもプレジャーボートが目玉に余る。都建設局が初めてまとめた「係留船白書」で、そんなルール無視の実態が明らかになった。(一九九七年四月十八日 読売)

河川や港への船の放置は許しません。横浜市は全国に先駆けて制定した「船舶放置防止条例」に基づき、プレジャーボートなどの放置船の初の強制移動を二十二日に、同市金沢区の富岡川で始めた。(一九九八年一月二十日 日経)

新車販売の不振に苦しむ自動車メーカーが、新たな多角化の柱としてヨットやモーターボートなどのマリンスポーツ事業に力を入れている。二月十一日に開幕する「東京国際ボートショー」には、いすゞ自動車が出展するほか、昨年初めて出品したトヨタ自動車もしなぞるえを大幅に強化する。国内マリンスポーツ市場は年間四千億円の規模だが、近い将来には一兆円に拡大すると期待されている。(一九九八年一月六日 読売)

【カヌー・ラフティング】

「ボート遊びはアユ漁のじゃま」「いや川は皆のもの」。徳島県山形町の大步危・小歩危渓谷に緊張気味の夏がやってきた。ゴムボート(ラフ

ト)で激流を下る新入ボートの愛好家が殺到したため、地元漁協と対立見かねた町の仲介で今シーズン、川下りの回数などを制限する協定がスタートした。アウトドア全盛の昨今、騒動の下の地は各地にチラホラ。どうやらブームに浮かれているばかりはいらない。(一九九六年七月七日 日経)

霞ヶ浦をきれいにしようと、茨城県玉造町で、クリーンキャンペーン「地球と話をうたう」霞ヶ浦カヌークルージング」が行われました。参加した三百五十人の小、中学生は、湖岸を清掃したり、水質検査をしたり。カヌーに乗って湖を渡り、岸から離れた湖の様子を観察することもできました。霞ヶ浦クリーン作戦を呼びかけたのは「青い海と緑の大地(ブルーシー・アンド・グリーンランド)運動」を進めるB&G財団地域海洋センターの茨城連絡協議会です。(一九九六年十月十三日 読売)

荒川でカヌー。多くのカヌーイストが集う荒川の上流。ダムでせきとめられた玉淀湖で九月初め、日本レクリエーション・カヌー連盟のスクールに参加した。カヌー専門誌「カヌーライフ」の藤原尚雄編集長は「ハブの後、自然志向の高まりとともにカヌー人口も増えているようだ。特にここ数年は若い世代が多くなつたように感じる」と言った。(一九九七年十月十六日 朝日)

コンクリートでカヌーを作り、速さやユニークさを競う「コンクリートカヌー大会」が、二十九日に埼玉県戸田市の荒川調節池で行われる。ねらいは、「モノ作りの楽しさを体験しながら、新たな素材の可能性を引き出すこと」。(一九九八年八月二十六日 読売)

水に親しめる街づくりを目指している「運河の町」江東区で、都心の川を利用したカヌー教室が開かれた。(一九九八年九月七日 朝日)

【サーフィン】

海のことには漁民に学べ。鎌倉・海の学校、始業ベル。本格的な海のシーズンの訪れを前に、ウインドサーフィンなど海洋スポーツの愛好者でつくる鎌倉マリンスポーツ連盟(中村省司会長)が十九日、鎌倉漁業協同組合(三留和雄組合長)と共同で「鎌倉の海を知る会」を開く。漁民から、漁網の仕掛けや古くから伝わる天気予知の方法などを学ぶ海の学校の開校だ。同連盟の松田穂理理事長は「対立しがちな漁民と仲良くすることが最大の目的。このあたりでは、こんな勉強会は初めてでしょう」と話す。(一九九六年五月十七日 朝日)

【海辺アラカルト】

水難事故に備え「着衣泳」。佐渡島の海、五十人が体験。服を着たまま泳ぐ「着衣泳」の研修会が一日、新潟県佐渡島の相川町鹿伏の鹿伏海岸で行われた。着衣泳に詳しい荒木昭好・都立科学技術大名誉教授が代表を務める「水泳指導法研究会」(事務局・新宿区)の主催で、同研究会や

地元水泳同好会メンバーら約五十人が参加した。水難事故防止を目的にヨーロッパで盛んになった着衣泳だが、国内での普及はまだまだで、釣りなどでの水死者が絶えない。(一九九六年六月一日 読売)

東京港を泳げる海に「東京港を泳げる海」を合言葉に、海洋環境保全週間の八日、港区の臨海副都心にあるお台場海浜公園で、ボランティアのダイバーや新しく近くに移民したばかりの住民たちが出て、同公園としては初めての海岸と海底の大掃除が行われた。この日の清掃を企画した全日本潜水連盟の須賀次郎さんは、「お台場を潜ってみるとダイバーも多いいはずで、今後海底清掃に協力したい」と話している。(一九九六年六月九日 読売)

普及急速、二万五千人が資格「第二十二回全日本ライフセービング選手権大会」(日本ライフセービング協会主催)が、二十一日から二十三日まで、神奈川県藤沢市の片瀬西浜海岸で行われる。もともと水辺での監視活動や水難救助から、技術向上と普及を目的に発展してきたスポーツ。こじは六十五チーム、千二百四十七人が、泳ぎ、走り、ボードを操って、十二種目に日ごろ鍛えた力と救助の技を競う。(一九九六年九月十七日 朝日)

水質や景観優れた「快適水浴場」選定。環境庁は今夏までに、全国約千三百カ所の海水浴場や湖・河川の水浴場の中から、水質や自然環境が優れた「快適な水浴場」五十カ所を選定。利用者が安心して水に親しめるような目安とするほか、自治体などによる水辺の環境保全を促すのが狙い。同庁は「快適さ」の指針を作

成済みで、こんご都道府県からの推薦を求める方針だ。(一九九七年三月二十九日 日経)

命を守る「海の鉄人」。日本ライフセービング協会(JLA)の認定資格を持つライフセーバーだ。活動を支えているのは、四千人の資格者のうち、大学生中心の八百人、危ないといふだけの存在にはなりたくない。海水浴客の無事をサポートするのが役割だから」と小林雅彦・JLA事務局長、ただ、ルールだけは守ってほしい」と呼びかける。ライフセービングは、市民の間で海水浴が一般的になった約百年前、英、仏などの欧州で誕生した。数年後、オーストラリアで競技や文化活動を取り入れた現在の形に発展した。国際ライフセービング連盟(本部・ベルギー)には、現在、百十九ヶ国、地域の組織が参加している。JLAは九一年の発足。(一九九七年八月二十日 読売)

「海辺の物語展」横須賀・ビーチコーミング。海洋生物研究者や主婦など七人で作る「横須賀横ばい歩きの会」が、横須賀付近などの海岸を歩きながら、海藻や流木、果物、ヒトデ、サンダル、漁船用の電球、塔婆などの漂流物を収集した。パネルなどと合わせて約千点を展示。メンバーで民俗学研究者の京馬伸子さんは「海での新しい遊び方です。どこから流れてきたのかなど、みんなで推測したり、調べてみるのが面白い」と魅力を話す。(一九九七年十一月二十日 読売)

市民の夏の憩いの場になる海や川、湖沼など、全国の水浴場をより快適に利用してもらおうと、環境庁は十一日、日本の水浴場五十五選」を発

表した。選定基準は、水質や、監視、救護など利用者の安全対策の確保など五項目。(一九九八年三月十三日 朝日)

【スイミング】

泳いでぜんそくを克服。泳ぎを楽しむながら病気を克服しよう」と二十七日、墨田区向島の区立屋内プールで、ぜんそく児のための水泳教室があり、夏休み中の小、中学生が元気に水しぶきをあげた。水泳が、気管支の病気を持つ人にとって、体力や抵抗力をつけるのに最適とあって、水泳連盟の協力で開いた。(一九九六年八月二十八日 朝日)

中高年に打ってつけ。水中散歩のすすめ。年を取ると運動から遠ざかりがちになるが、温水プールでの「水中散歩」なら高齢でも続けられるし、運動効果も高い。自治体などによる教室も登場し、愛好者も広がっている。水中運動の指導などを行うアクアダイナミクス研究所(横浜市)の所長の今野純さんは「水中散歩は特に高齢者にとって、適度な運動としてもってこい」と指摘する。高齢者の水中歩行の効果を調べている国立健康・栄養研究所(東京)の吉武裕さんは「筋肉を保ち、持久力をつけるのに役立つ。肥満の解消、腰やひざの痛みの予防にもつながる」と話す。(一九九七年一月八日 読売)

水中でのエクササイズ、アクアサイズ(造語)。これが今、水泳指導プログラムの新しい方向性として注目されている。この水中運動法を現役の水泳指導者向けに紹介するだけでなく、専門の指導者を一から養成しようという講座が開講されて

いる。(一九九七年六月二十日 日経)

「重たい」「動きにくい」「足が沈んじゃうよ」。Tシャツ、ジャージに運動靴などの格好のままプールに飛び込んだ子供たちから、歓声とも悲鳴ともつかぬ声があがった。今月四日、千葉県松戸市の市立幸谷小で開かれた着衣泳教室。参加したのは、同小児童で作る「三ヶ月(みこせ)子供会」のメンバー五十九人とその母親たちだ。「着衣泳」とは、服を着たままおぼれた場合に備え、着衣での泳ぎ方や救助法などを覚える訓練。この日は、主催の松戸青少年会館が日本の着衣泳研究の草分けである野沢巖・埼玉大教授(野外運動学)に依頼したもので、教え子の大学院生三人が講師役として招かれた。(一九九七年八月十四日 読売)

主流はシェーブアップ型。冬場の水着の売上が伸びている。健康や美容にいいと温水プールで水泳を楽しむ女性が多くなったのに加え、メーカーが新作モデルの投入を早めたり、冬場の水着にも最新流行のデザインや柄を取り入れたりすることなどが、重要を増やしている理由のようだ。(一九九八年一月七日 読売)

【ホーム

アクアリウム】

十数種類の熱帯魚が泳ぐ水槽。そのガラスの側面の穴から手を入れて魚に触れることができます。そんな不思議なミニ水族館が、東京・銀座の電力会社ショールームに登場、人気を集めている。(一九九六年十一月七日 日経)

アクアインテリア。水草は水槽の環境を浄化しているんです。森林が大気をきれいにするようにね。東京・練馬区で、アクアインテリアの専門店を経営する尾崎初さんは緑深い水中の森をいとおしむ。熱帯魚の添え物だった水草の浄化能力に早くから着目し、水槽の中に生態系を作り上げる技を編みだしたパイオニアの一人だ。(一九九七年十二月二日 読売)

水質浄化機器開発ベンチャーのイワモト理研はメンテナンス不要の熱帯魚水槽「マリノクリスタル」を開発、全国で発売した。下部に埋め込んだろ過装置が魚のふんやえさを分解して水を浄化するため手入れの必要がない。(一九九八年二月三日 日経)

海水魚。観賞向けに人気浮上。淡水産の熱帯魚が中心だった趣味の観賞魚の世界に、クマノミなど海水魚が目立ち始めた。これまで、飼育が困難とのイメージが強かったものの、人工海水、ろ過器など関連用品の改良や低価格化も手伝って、挑戦する人が増加。色がより鮮やかなのが魅力だが、海水魚は天然物がほと